おきん

水上勉

水上勉
おきん

新潮社版

© Printed in Japan. 1965

おきん　定価三四〇円

昭和四十年九月二十五日　印刷
昭和四十年九月　三十　日　発行

著者　水上　勉
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七　電話
東京(260)二二一　振替東京八〇八
印刷　株式会社　金羊社
製本　神田　加藤製本所
（落丁本はお取替えいたします）

お

き

ん

装幀　佐野繁次郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

一章　名前について

1

おきんは、物心つくようになって、自分の本名が絹子(きぬこ)だとわかると、村の人や、家の者たちが、おきん、おきんと、心やすく呼ぶのが、不思議でならなかった。なぜ、絹子とよんでくれないのか。学校へゆくようになっても、絹子は、やはり、おきん、または、おきんちゃんとよばれた。

「お姉ちゃんら、文子ちゃん、文子ちゃんいうて、本当の名アをよんでもろてええなア。うちだけ、なぜ、おきんいわれて返事せんならんのやろ……いつまでも、小っちゃい子オやないのに……」

姉の文子に訴えてみることがあった。すると、おきんとは眼も鼻も、口もとも、声も似ていない、鴉(からす)のように顎(あご)のとがった姉は、冷酷そうなつり上った眼をしかめて、

「あんたには、絹子ちゅう名アはそぐわんわな。やっぱり、おきんの方が似おうてる……あんたかて、誰(だれ)によばれてもおきんで、返事してるやないか」

といった。返事するのは、致し方ないからである。二つ三つのころから、おきん、おきんとよばれて育った絹子には、それが自分の本名のような気がしたことも事実だ。絹子という自分でも好きな字の名前があるのに、おきんとよばれるのが、心外に思われたのは十歳ころであった。七つ上りだった絹子は、小学校三年生のとき、三つ年上の姉が五年生にいた。自分よりは背もひくく、やせて貧相な姉は、文子と本名を先生からよばれているのに、柄が大きくて、自分でも、姉よりは美しいと思える絹子の方を、先生は、

「おきんちゃん……」

とよんだ。

「先生、うちには絹子ちゅう名前があります。どうぞ、絹子ちゅうてよんで下さい」

とおきんは訴えた。すると、同じ村から通っているこの師範学校を出たての近視の度の強い眼鏡をかけた男教師は、

「おきんちゃんいわれて、何がはずかしいんやな……おきんちゃんは……かわいらしい子オや。絹子のお絹を早口にいうて、おきんとなまった愛称や……先生は、あんたのことを、おきんちゃんとよんだ方が、よっぽど親しみがわく」

といった。おきんというのは、自分への愛称だったかと、絹子はその時から考えなおしてみたが、しかし、おきんとよばれるひびきの中には、かすかな蔑称がまじっている気がした。先生は嘘をついていると思った。

おきん――時田絹子のうまれたのは昭和元年である。福井県遠敷郡熊川村大字新道という部落にうまれている。おきんは後年になって、それが、本当の父母でなかったことを知ってびっくりすることがあるのだが、十三歳までは、本当の父母だと信じていた。弥助ときちは、新道で百姓をしていた。弥助は百姓のヒマな時は、屋根職人になって、普請場を廻る技術者だった。きちもまた、よく働く女であった。おきんの計算によると父弥助が三十二歳、母きちが、二十六歳の時におきんはうまれている。屋根職人の家だから、農機具のほかに、屋根ふき道具が土間の壁にいっぱい立てかけてある。弥助は、農閑期がくると、道具箱に、大鋏やら、小鋏やら、型の奇妙に折れ曲ったような樫のタタキ棒を担いで働きに出かけた。十日も二十日も帰ってこない日があった。母親のきちは、朝から孤あみをしていたが、娘の文子とおきんを土間に敷いた荒莚の上にすわらせ、おじゃみとよぶ、小豆粒を布袋に入れて珠にしたものを十ばかり手渡し、上へほうりあげては手の甲でうけとめてあそぶ、かぞえ歌を教えた。

ひとつとや、一つあったて役たたぬ、役たたぬ。箸かいな。

ふたつとや、二つあったて、役たたぬ、役たたぬ。サンボの足かいな。

といったような歌である。習ったころは、いったい、このような文句は、何を意味しているのかおきんにはわからなかった。教えられるままに、布袋の珠をほうりあげ、左右両手を交互に巧妙にうごかしながら受けとめて歌った。

三つとや、三つあったて、役たたぬ、役たたぬ。カワソの土俵かいな。

きちは瓜実顔の白い餅肌の女である。百姓仕事をしない冬のあいまは、ぬけ出るような艶のある白い顔をしていた。この美貌の母も、おきんと似ていなかった。まだ学校へ入らないころ、「おきんちゃんは誰似じゃろ、鴉のような黒い顔したお父ちゃんとも似とらんし、餅のような白いおっ母の顔にも似とらんがな……誰の子やろ」と冗談のように言われたものだが、そのことは、十三、四歳になって鏡をみるようになってから、よくわかった。色の黒い父の顔は、一日じゅう屋根をふいて帰るから煤をあびている。その煤の色がシミたと教えられた。弥助は寸づまりの、口先のとがった文子そっくりの顔だった。だから文子は屋根職人弥助の子だとはっきりわかったけれど、おきんだけは、まったく造作も、背丈も父とはちがっていた。どちらかというと、色の白いのは母親似である。だが母のように

ぷってりとふとりすぎてはいない。初潮をみた十四歳の春ごろには、ふっくらしはじめた乳房のあたりは、肩はばも広くて豊満な発育ぶりだったし、胴のあたりへくると、くびれたように細まり、臀部が、また姉の倍もありそうなほど大きくて、股からふくらはぎにかけては、すんなりと長い足が細まっていた。ずん胴である母からもらったものにしては整いすぎていた。

おきんは昭和十四年に、熊川小学校を卒業したが、その年の春、四月半ばに、きちにつれられて、河内の鉱泉へいった。その時はじめて、その女にあった。

どういうわけか、その日の朝になって、急に、きちは、おきんだけを部屋の隅へよんで、

「おきんちゃん、ちょっと、お母ちゃんについておいなはい……ええとこへつれてったげる」

とささやくようにいった。ええとこといわれても、まさか、新道の村から、遠くはなれている鉱泉宿へつれていってもらえるとは思っていなかったので、きょとんと母を見仰いでいると、

「さ、このべべ、着なさい」

当時は、娘の他所ゆき着というものは、メリンスの単衣にきまっていた。じかに着ると、毛ばだって、肌がゆいので、白い木綿の裏襦袢をきる。その上に、単衣を着、三尺のやはりメリンスの帯をしめた。おきんは、胸が高鳴った。こんな着物をきせられる日は、年に一どか二どしかない。母が小浜の祭りにゆく時か、京都府の境いにある青葉山にある西国二十三番所の札所松尾寺に詣る時ぐらいだった。

「あのな、河内の鉱泉知ってるか……そこへな、ゆっくり湯につかりにゆこ……お母ちゃんとふたりでゆこ」

と、きちはまるで内緒事をささやくようにいった。姉を同伴していかないことが、当然、気にかかったので、

「文ちゃんもゆくのん」

と訊ねると、

「文子はこんどの時につれてったる。お父ちゃんは屋根仕事で隣りの本所へ行っとるさかい、留守番してもらわんならんさかいな、……さ、早よゆこ」

文子が外へ出ているスキを見はからうかのように、母は、茅ぶき屋根の家の裏口から、こっそり白い日傘をたたんだまま杖にして藪の中を出た。おきんは、母のうしろを尾いて走った。母の足は早かった。

藪をぬけ、畑道に出ると、文子がのこっている家が小さくなってみえる。すぐに大川がある。川に架った木橋をわたると白い砂利道の国道が山に吸われている。

あつい日だった。国道わきの屋根をふいた待合所に古いよごれたバスがとまった。ピリピリと笛がなってバスはすぐ動き出したが、車内には、六、七人の男女がいた。いずれも、近在の百姓たちであった。母は、それらの男女に「は

あーい、ええ日和でござんす」と高い声であいさつした。その時、お歯黒した母の口はまっ黒にみえ、くちびるだけが、血のように赤かった。おきんは、母のわきにすわった。

この国道は、若狭から滋賀県へぬける一つしかない国道で、山がふかいために、学校時分にも、ついぞ、深くまで入ったことはなかった。遠足といえば、北に向って海へ出るか、鉄道の通っている三宅の駅へ出て、そこから、汽車にのって、舞鶴や、高浜へいったことをおぼえているだけで、反対側の山奥へ入りこんだのは、この時がはじめてだった。おきんは、いつも新道の村の空に、おいかぶさるように屹立している山々が、いま、バスにのってゆくと、それぞれ、いくつもの谷や尾根に分れているのがめずらしかった。曲りくねった白い兵古帯のような道がどこまでもつづいてゆく。

「河内鉱泉前」というバス停留所は、かなり山をのぼりつめた地点にあった。バスがとまると、母は、おきんの手をとって、車内の客たちに、「はあーい、それでは、ごめんなさんせ」といった。すると、男女の客たちは、口ぐちに「はあーい、行ってござんせ」といって別れのあいさつをするのだった。

おきんはなぜか、顔がほてった。母がいつになく、うきうきしていたためである。バス停留所から、右に折れると、国道よりはいくらか細い桑畑の道があった。この道をおきんは母と三十分ばかり歩いた。すると、前方に山の迫った谷がみえて茅ふき屋根の大家がある。白煙がたちのぼっている。煙はうるしを溶かしたようなうしろ山のみどりに、吸われていた。

「さ、ついたぞ、おきん」

と母は、いった。

「ついたら、ごっつおをくわしてやっと」

おきんは、なぜ、母がこの時、こんなことうきうきといったのか、後年になってわかる時がくるのだが、しかし、その時は、自分だけ、母のやさしさにふれているのが、姉の文子にわるいような気がしていた。

河内鉱泉は、渓奥から湧いて出る塩度**のつよい冷泉**であった。昔から、りゅうまち、肩のこり、**神経痛に効く**といわれて、近在の農家から、百姓たちが、**湯治にくるところ**であった。河内屋という一軒きりの大きな**宿がある**。宿の茅ふき屋根は、新道の菩提寺の大屋根よりも大きかった。かわらぶきの軒をつけたして、谷川へせり出すように建てられた浴室は、杉戸にかこまれて暗かったけれど、広かった。戸のスキマから湯気が立ちのぼり、先程、桑畑の中からみた煙は、湯気だったのかとおきんは思った。湯気は一軒家の宿の周囲から、霧のように湧き上っていた。

母のきちは、玄関を入ると、すぐに、奥の廊下へゆき、

年輩の女中とひそひそ話をしていたが、やがて、女中が庭先のみえる小部屋へおきんをつれていった。おきんは置物一つない殺風景な部屋で、母がくるのを待っていた。母は、帳場の方で、二十分ほどはなしこんでいた。やがて、部屋へくると、

「さ、早よ、汗をながそ……おきん…ここまでくるのに、仰山汗かいたな。お母アも、お父ちゃんのように顔がバスの煤でまっ黒けのけや」

そんなことをいって、おきんをつれて、浴室の方へいった。

母は四十歳になっていたから、脱衣場で、立縞のセルの単衣をぬぎ落した時は、むっちり肥っていたにしても、さすがに皮膚はたるんでいた。おきんは裸になった。母について、浴室へ入った。湯気が乳いろに充満している。ささくれた板床に、ぬるりとした湯垢がたまり、足がすべりそうである。誰もいなかった。母は杉戸のあいている明るい方へゆくと、タオルに湯をつけて前を洗ってから、

「さ、おきん、お湯に入ろ」

といった。そうして自分が先に大跨ぎに湯舟をまたいで、首までつかった。おきんは大風呂に気を呑まれた。おじけをおぼえつつ、自分も湯舟をまたいだ。

ぬるめのお湯は気もちよかった。下から湧きあがってくる温熱が、足裏をくすぐるようにはい上ってくる。おきんは、タオルをつけて、何ども肩に湯をかけた。

と、この時であった。母と二人きりの浴室へ、戸のしまる音がした。おどろいてふりかえると、湯気の向うの脱衣場に、女が立っている。おきんは、思わず、タオルを乳房の上に被った。もっとも共同湯であるから、誰が入ってきてもいいわけであった。男の人だったら、どうしようかと、おきんは思ったのだが、湯気の向うに立っているのは女なのでほっとした。しかしその女の顔はまるで、絵からぬけ出たように美しかった。都会人の顔であった。チラと浴室の中をのぞいてから、ゆっくり帯を解きはじめた。

おきんは母の方をみた。母は眼をつぶり、大きく息をついて、湯に全身を沈めている。心もち、おきんは軀をずらせて、母の方へよった。母は入ってきた女に気づかないらしかった。

と、新しい女客は、戸をあけて、湯気を割るようにして近づいてきた。顔がはっきり見える。

おきんは、横顔をみた時、はッとした。この顔はどこかでみたようだと思った。しかし、すぐには思いだせなかった。女はだまって、湯桶をとった。湯をかい出して、軀にかけている。白い美しい軀だった。乳房が、上向きに、こんもりもり上っている。湯気にむれて、白い肌が次第に色づいてゆく。腹から股にかけてシミ一つない軀である。おきんは、みるともなしに、みていた。と、視線がつきさす

ようにおきんと合った。
女はにっこり笑った。その眼は、おきんを知っているような眼だった。おきんは赧くなって眼を伏せたが、動悸がはげしく打った。おきんはこの女をどこでみかけたのだろうと考えた。しかし、どうしても思いだせない。
「いいお湯どすなア」
女は眼をつぶって母にとも、おきんにともつかずに、はなしかけてきた。
「こちらの近くからおいでになりましたの」
おきんはますます羞恥で固くなった。女はやさしい澄んだ眼をおきんにむけて、
「お嬢さんは何てお名前」
母がこのとき眼をあけて
「はい、おきんちいますがの」
といった。女はなごめた眼をおきんにむけた。おきんはだまって顔を伏せていた。恥かしかった。

2

やさしい女だと思った。
おきんは、小さい時から人見知りする性質だ。けれども、相庭きよのに、はじめて微笑みかけられた時に、なぜだか、魅きつけられるような親しみをおぼえた。風呂の中の、乳色の湯気を通して見たきよのの裸体は、卵の肌のように、キメがこまやかだった。白肌が、湯の温度で桃いろに染まってゆくのをみていると、おきんは羞恥をおぼえた。こんな美しい女が、こんな山なかの鉱泉宿にきているのが不思議な気がした。
きちは、ひとことふたこと、女とあいさつしただけで、やがて、湯舟をまたいで床にあがると、手桶に湯をためて、軀を洗いはじめた。母の肌は、黒かった。それは、その女の白い肌と見比べるせいか、いっそう、百姓女らしい陽に焼けた肌をきわだたせてみせていた。
いつまでも、湯につかっていると、のぼせた。おきんは、母のそばによって、自分も石鹸をつかおうとした。すると、湯気の中で、
「おきんちゃん、よろしかったら、あとであたしのお部屋へきませんか」
とその女はいった。おきんは全裸の軀を石のように固くした。すると、背中をこすっていたきちが、
「はあい、ありがとうさんでございます……あとで、よせてもらいますわいな」
といった。おきんは美しい女のところへあそびにゆけるかと思うと嬉しかった。
きちとおきんは、浴場にその女を置いて、先にあがった。部屋へくると、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「おきんちゃん、あのお方と一しょにごはんたべるか」
と母がきいた。おきんは驚いた。母はすでに、あの女がここへきているのを知っていたのではなかろうか。そうでなければ、なぜその女がまだ浴場にいるのに、一しょに昼食などしようといいだしたのだろう。
やがて、年輩の女中がやってきて向うの部屋へ案内するといった。母とおきんは、その女——相庭きよのの部屋へ通された。おきんたちの部屋とちがって、きよのの部屋は床の間もあり、庭木もみえる縁があった。広い部屋だった。おそらく河内屋の最上級の部屋だったのではなかろうか。床の間のよこに、細長い鏡台がある。いま、その前で、浴衣の脇口から、脇下をのぞかせて、せわしくパフをつかっている女のうしろ姿をみていると、
「すぐに用意が出来ますわ」
といった。そうして化粧にかかった。きちは縁先に立って、庭の方をみていた。おきんは、その女と一しょに食事をしなければならないと思うと、恥かしさをおぼえた。おきんは、これまでに、他人と一しょに食事をしたことはなかった。屋根師の家の居間で、姉の文子と一しょに、食事をした以外には、他家へよばれていったり、食堂で、金をはらってたべた経験がない。家が貧しかったためでもあったろう。前述したように、たまに、母と一しょに外出して、小浜の町や、青葉山の松尾寺へ出かけた時も、欠かしたことのないのは、弁当だった。弁当——。おきんには、思い出深い弁当である。入れものがふるっていた。竹であまれた矩形の入れものは、重箱のように大きかった。温かい飯を入れると、温気にむれて竹はやわらかくなる。母は二人分をもりつけてフタをした。お菜といったものはべつになかった。沢庵漬か、梅干をヘギにつつんで一しょに新聞紙でくるんでおく。これは、父の弥助が屋根ふきに出かける時の弁当と同一のものであった。おきんは、竹であんだその弁当箱が、白飯の水気を吸いこんで、フタをあけると、干いたあまい飯に変っているのをたべるのが好きだった。母と一しょに、フタをあけ、ミとフタに飯を半分わけするのが楽しかった。
貧しい食事しかしたことのないおきんは、いま、この河内屋の広い畳敷きの部屋へ、女中たちがはこんでくる食事をみて、眼を瞠った。焼魚があった。刺身があった。すいものらしい椀も出た。青菜のしたしもみえる。おきんは、咽喉がなった。
鏡台の前にいた女が、
「さ、これも、何かの縁どっしゃろ、一しょにごはんをいただきましょ」
といった。おきんは母と女の前にすわって、夢中になって食事をした。おいしかった。おきんは女中に三どもごはんのおかわりをした。

相庭きよのの部屋に一時間ばかりいたであろうか。きちは、新道の村で屋根ふきをしている弥助のことや姉の文子のことなどくわしく家の事情をはなした。

「へえ、お姉さんがいやはりますのん」

相庭きよのは澄んだ眼を烱らせて、おきんをみた。

「いま、おいくつどす」

「この子より三つ上にございます」

と母はこたえた。

「おきんちゃんのように、おきれいですの」

と女はきいた。

「それがのう、父親そっくりの黒い顔をしとりますねや。おきんだけが……白うございます」

きちは、おちょぼ口をしていった。相庭きよのは眼をほそめていつまでもおきんを眺めていたが、母親と会って、食事をしたことが、退屈しのぎになったというよりも、面白い村のはなしなどがきけて、たのしかったといわぬばかりに、歯なみのいい口もとをほころばせているのだった。

おきんが、河内鉱泉を出たのは、三時だったが、いったい、母が、何の目的で、この鉱泉宿にきたのかと考えてみると、やはり、相庭きよのに、おきんを見せたいためではなかったか、という気がした。それでなければ、母はいったい、不意に、どうして、鉱泉になど、つかりにきたか。りゅうまちでもなかったし、神経痛でもなかった母が、朝早くに鉱泉へ走るようにしてつれてきたのは、相庭きよのに対面させる目的以外にはなかったはずだと思われた。

「あのなアえ、お姉ちゃん、うち、河内の鉱泉でな、きれいな人に会うて、ごっつおになった」

とおきんは帰るとすぐに姉の文子にいった。文子は高等科を卒業して、当時、新道の村に出来た養蚕場へ、夕方になると桑やりに通っていた。桑の葉の汁のしみこんだ指をこすりながら、

「ふーん」

といっただけである。妹だけが、鉱泉へつれていってもらったことに羨望をおぼえたものか。それとも、お前だけは、もうすぐ、この家を出てゆかなければならない他人の子なのだと、腹の中で考えていたものか。柿のタネをならべたような鼻腔を仰向けて、姉は押しだまっていた。

おきんは、姉の表情に淋しさをおぼえた。この姉はどうして、自分に、冷たいのだろうかとかなしかった。

幼ない記憶の中で、裏の柿の木にくくられて、髪の毛をひきむしられた記憶がある。姉は恐ろしい女だと、思いきめねばならないような、おきんに、畏怖感がたえずつきまとっていた。

屋根ふきにいった父親が十日も二十日も帰ってこない。母のきちは、小作田圃に出て夕方にならぬと帰らない。藁屋根の家へ、昼食時に腹をへらして帰ってくる姉妹は、自

分自分で食事をしなければならなかった。たぶん、喧嘩の原因は、食事だったかもしれない。母が仕事に出かける際に、わけへだてのないよう、お菜を、皿に分けて戸棚に入れておくのを、どちらかが、先にたべてしまっていたのが原因している。はじめは、口ごたえをしていたのが、親もいない家の中で大喧嘩となり、おきんは縁先から、文子に蹴りおとされた。なおも、おきんが、あくたいをついたので、文子は、三つ年上の腕力にたよって、裸足でかけ下りるとおきんをひきずり、裏の柿の木にくくりつけた。そうして、髪の毛をひっぱって、折檻した。姉の形相は物凄かった。おきんは肌に喰い込む荒縄の痛さと、髪をひっぱられる痛さで、半死のようになった。だが、歯を喰いしばって、にらみつけていた。

おそろしい姉だという思いは、そうした経験からもったものだが、この姉と自分は血のつながりがないのだとわかるまでは、どうして、こんなに、姉が自分をいじめ、つらくあたるのか、わからなかったのである。幼ないころから、おきんがいじけて成長せねばならなかった理由には、この姉の存在が大きくかぶさっている。

父親の弥助はいつも文子びいきで、留守中のことを、あることないこと、文子が訴えると、弥助は煤けた鼻の腔をふくらませて、おきんをにらんだ。ふくろうのような黒い顔の中で、眼だけがぎろりと光る父の顔は異様だった。おきんは、その父の顔にもおびえた。だから、河内鉱泉に出かけて十日ほどして、母のきちが、薪小屋の軒下に、おきんをよんで、小声で、

「おきん、お前……名古屋へいかんか、名古屋へ……いって、女中さんせんか」

といった時には、おきんは、びっくりすると同時に、とうとう、母が、考えつめていたことを切り出したような気がした。

「ほら、お前、知っとるか、相庭さんの奥さんやな」

ときちはいった。最初、おきんは、相庭さんの奥さんといわれて、わからなかった。河内の宿で会った人だといわれてびっくりした。そうして、すぐ胸をつきあげてくる温かいものをおぼえて息をつめた。

「お母ちゃん、あの人、名古屋の人やったのん」

とおきんはきいた。

「そうや……何でもな、鶏の毛ェあつめて、首まきにしやはる工場をもってはる旦那さんがな……えらい成功しやはって、日本じゅうに、ホテルやら、旅館やら、つくって、事業してはるそうや……あの奥さんはな、こんどな、仙台の方に温泉村が出けて……そこで、旅館をしやはる……ぜひとも、おきんちゃん……あんたにきてほしいいうて……たのんできやはったんやがな」

おきんはびっくりした。いったい、いつのまに、母は、

相庭きよのと、そのような連絡をしたのだろう。不思議な気がしたが、いま、おきんの胸に、かけのぼってくるのは、よろこびだった。

「名古屋へゆくのん」

「そうやな。名古屋でな、少うし、行儀をおぼえてな……ちいとたってから、仙台の方へゆくんやそうや、……うちにいること思うたら、ラクえ。あのお女は心のやさしい人やさかい……きっと、おきんちゃんには親切にしてくれはるにきまってるわ」

きちはそういうと、しょぼついた眼尻に涙をチカリとうかべて、

「おきんちゃん」

あらたまったひくい物言いでいった。

「あのな、いおう、いおうと思うとったんやけど……おきんちゃん、おきんちゃんはな……お母ちゃんの子オやないのや……本当のことをいうと、お父ちゃんの子オでもないのんや。文子姉ちゃんは、お父ちゃんの子オやけんど……おきんちゃんは、ちがうのんや」

おきんは、眼先がくらむのをおぼえた。息をつめて母のよごれた顔をにらんでいた。

「お母ちゃん、ほんなら、うちのお父ちゃんは誰やのん」

おきんはきいた。

「お父ちゃんは、死なはった……」

と母はいった。母はうなだれるように頭をぺこりと下げ、まるで、おきんに謝るように卑屈にみえた。おきんは、母のうしろ首をみていると、眼頭がくもった。何といって、母にいま、言葉を投げてよいかわからない。憎しみとも、かなしみとも、つかぬ感情が逆まくれた。

「あのな……おきんちゃん、このことは大きゅうなったら、云おう、云おうと思うとったんや……おきんちゃんはここへもらわれてきたんやのん。お母ちゃんはいままで、おきんちゃんのお母ちゃんやというてきたけんど、本当はな……お腹をいためた子オやないのんや……」

おきんはまた、眼先が暗くゆらめいた。

「ほんなら、あたしのお母ちゃんは誰や」

「お母ちゃんも死なはった」

きちは鼻洟をすすりながらいった。

「あんたは、な、かわいそうな子オやったんや。二つの時やった……お父ちゃんが屋根ふきにいってて、そこの御主人からあずかってきた子オや……かわいそうな子オやった……二つの時から、あんたは、うちで育った……せやさかい、お母ちゃんは、あんたのことを、本当にお腹をいためた子オやと思うて育ててきた……わかってくれるか」

二つの時だったとするなら、姉の文子は五つの計算になる。とすると、自分は、文子が離れた母親の乳房をそのままうけついで育ったのであろうか。おきんは、きちがうろ

たえてはなす、言葉の意外さに、打ちのめされた。
「お母ちゃん、ほれで、うちが、名古屋へいった方が……しあわせになるのん……」
「お前は、姉ちゃんとうまいこといかん、お父ちゃんとも うまいこといかん……これから、大事な年ごろになるちゅうのに……このまま、うちにおったら、のびられへん、それで、お母ちゃんが……あのお女にお願いしてみたんや……おきんちゃん……相庭の奥さんはな、やさしいお人や、お前があの人のところへ行きたいと思うなら……早よオに行って大きゅうしてもろた方がええ思うのんや。……どう思うえ」
おきんの眼に滋賀境いの山波がうるんでみえていた。数日前に、バスでのぼった武奈岳の渓谷だ。湯気のたちのぼる浴室でみた、白い肌の相庭きよのが、眼をほそめて、やさしくおきんを呼んでいる。おきんは、こっくりうなずいた。
「行ってくれるか」
ときちは喜色をたたえていった。行ってくれるのか、と母は安堵したようにいったわけである。おきんはかなしく思った。薪小屋のささくれた薪束に手をついて、しくしく泣きはじめた。

3

母のきちが、その時、おきんに語ったところによると、屋根師の弥助が、小浜の町へ働きにいっていた先で、おきんをあずかってくれないか、とたのまれたというのだった。
十一年前といえば、ちょうど、おきんはまだ二つになったばかりで、昭和二年の暮だ。冬場は屋根仕事のない弥助は、炭を焼いたり、日傭に出たりして、春を迎えるのが習慣だったが、屋根仕事の注文をきくためには、冬あけに棟梁のところへあいさつにゆかねばならなかった。弥助の棟梁は小浜の町はずれにある西津にいた。長田万作という大工頭だった。近在の町や村の普請を一と手にひきうけて、足場人足や、建具師にいたる大勢の職人を抱えている。新道の村からきた弥助に、万作は、女の子をあずかってくれとたのんだのはほかでもない、弥助の家に文子という娘がいて、当時五歳になっているのにあとが生れる様子がない。弥助も、もう一人ぐらいいてもよいとは思っていると口ぐせにいっていたが、生れない。棟梁から、たっての願いだから、きいてくれ、と懇願されれば、ことわるわけにゆかなかった。家は貧しいながら、小作田も少々はあり、働き者のきちが留守を守っている。すでに乳ばなれもして

いる赤子をあずかって帰っても、養うことは出来た。弥助は、棟梁から歩のいい仕事先も世話してもらわねばならない立場だったのでひとつ返事でひきうけて帰った。

〈いったい、その娘は、どこのお子さんですかい！〉

と弥助はこの時、きいている。すると棟梁はちょっと眉をしかめて、

〈小浜の大旦那の女中がのう、だんなのタネを宿してのう。かくれて生んだ子オや、事情をきいてみるとかわいそうな赤子なんじゃな……お前にあずかってもろうても、お前の子にしてくれというわけやないわいな……わしが、少しずつ養育費を出してやるしな。……ま、里親になってほしいわけや……〉

という。大旦那の体面にもかかわるらしかった。いくらかの養育料がもらえるならば、嬶のきちも、承諾するだろう。弥助は、気が大きくなって、棟梁の細君から、その子をあずかった。自転車のうしろにくくりつけた道具箱の上にふとんを敷き、二つの子の入った籠をゆわえて弥助はきいた。

〈そんなら、この子は、何ちゅうなまえですねや〉

〈おきんというてな……本当の名は絹子じゃそうじゃ……〉

と万作はいった。

どういうわけか、成人してからのおきんの戸籍謄本には、福井県遠敷郡小浜町西津長田かねの私生児として生れ、三歳にして、福井県遠敷郡熊川村字新道、時田弥助の次女として入籍す、とある。もっとも、おきんは、戸籍謄本などというものを、この当時にみたことはない。ただ、はじめて、きちの口から、お前は、おっ母あの腹をいためた子やない、といわれた時に、おきんは、それでは、いったい、自分は誰の子なのかと、きちに喰いさがって訊ねただけにすぎなかった。

「お父つあんが、自転車のケツにくくりつけてのう。お前をつれてもどらんしたのは二つの時やった……おっ母は、お前が、つやつやした顔して、泣きもせず、きょとんと、晴れた空みて、笑うとるンをみた時、こんなかわいい子オを放さんならん母親は、きっと事情があったんじゃろう、かわいそうな子オや……そない思うて、お父つあんから、子を抱きとって、わての子のように育てた。はじめは、棟梁さんの家から、いくらか、養育費がきたけんども、このお人は、それから一年ほどすっと、ぽっくり中風で死なんした……約束は、学校へゆくころまであずかってくれということじゃった、……わては、お前を育てとるうちに、ほんまの子オのように思われて、とうとう、文子の妹ちゅうことにして、育てる決心をした……おきん、これだけが、わての知っとることや……嘘なことはひとつもないぞ……」

ときちは、薪小舎の軒の下で、しゃがみ腰になっていう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.